

令和5年度 学カスタンダード指導計画・報告書

教科：(国語) 科目：(現代文) 対象：(第3学年 A組～F組)

科目担当者：

教科・科目の指導目標	近代以降の様々な文章、特に評論文を中心とした文章の構成・要旨・展開などを的確にとらえる能力を高める。 近代以降の様々な文章を読むことで、ものの見方・感じ方・考え方を深め、主体的に表現できる力を高める。
------------	---

	高校入試等の分析結果・前年度の学力調査分析結果	分析結果を踏まえて検討した指導内容	指導体制の確立
年度当初	<p>1 国語知識 説明的文章における語句の知識 ■ 同訓異字の知識 ■ 類義語の理解 ■ 語彙（慣用句）の知識 ■ 語彙（四字熟語）の知識 ※ 上記項目においては、ほぼ平均である。</p> <p>2 現代文（評論） 思考力・判断力・表現力は全国平均レベルにある。共通テストを見据えた学習を継続する。近代文学史については、これまでの学習で触れてこなかったが、大学入試や看護系の入試で出題傾向にある。</p> <p>3 現代文（小説） 全体趣旨の理解、語句の意味の理解、心情の理解がやや不十分である。</p>	<p>1 説明的文章において、特に形式段落・意味段落ごとの内容を捉えた上で、全体構成を的確にとらえる力を身につけ、要約力を高める。</p> <p>2 小説における場面や人物の設定がその後の話にどのような働きをもたらしているかを把握し、説明することができる力を高める。</p> <p>3 必要な情報を用いて、相手や目的、課題に応じた適切な表現力を身につけるとともに、漢字・慣用句等の知識を身につける。適宜、演習の時間を設け、実践的な学習を習慣づける。</p> <p>4 定期考査などを利用し、近代文学史の学習時間を確保する。</p>	<p>教科会で下記の指導方針を確認する。</p> <p>1 漢字の小テストを週1時間実施する。</p> <p>2 説明的文章に使用される語句の難解なものについては副教材などを利用しながら補足指導を行う。</p> <p>3 様々なテーマの文章に触れさせ、多角的な視点から文章を読むことができるよう指導する。</p> <p>4 要旨をつかめるよう150～200字要約に取り組みせる。</p>

	生徒の変容	生徒の学力の定着状況	次年度に向けた指導体制の改善
年度末			

令和5年度 学力スタンダード指導計画・報告書

教科：(公民)科目：(政治・経済) 対象：(第3学年A組～F組)

科目担当者：(A組～F組：)

教科・科目の 指導目標	広い視野に立って、民主主義の本質に関する理解を深め、現代における政治、経済、国際関係などについて客観的に理解するとともに、それらに関する諸課題について主体的に考察でき、公正な判断力を持ち、良識ある公民として必要な能力と態度を持てるようにする。
----------------	---

	高校入試等の分析結果・前年度の学力調査分析結果	分析結果を踏まえて検討した指導内容	指導体制の確立
年度当初	政治・経済の基本的な知識が不十分である。 政治・経済の実際の諸課題についてあまり興味関心を持たない。 新聞等を通じて現代の諸問題に触れることが少ない。	1 基本的な政治・経済の概念について教科書や資料集を通じてきちんと理解できるように授業内容を精選する。 2 基本的な内容がどのように実際の諸課題とつながっているか、を理解できるように新聞等を授業で利用するNIEの手法を用いる。 3 近い将来有権者となる自覚をもって市民感覚をそれぞれが持てるように社会への関心を自発的に持てるように時事問題を取り上げていく。	1 個別の質問対応 年間を通して日常的に生徒の質問等に対応する。 2 定期考査前の対応 考査ごとに学習目標を示し、自律的学習を促すとともに、質問に対応する時間を確保する。 3 図書室との連携 図書室の新聞、資料集や年鑑等の参考図書の利用法を司書と協力しながら指導する。 4 新聞数紙を比較し、多角的な視点から社会の諸問題を見ていく練習をする。

	生徒の変容	生徒の学力の定着状況	次年度に向けた指導体制の改善
年度末			

令和5年度 学力スタンダード指導計画・報告書

教科：(公民科)科目：(倫理) 対象：(第3 学年A組～F組)

科目担当者：

教科・科目の 指導目標	人格の形成に努める実践的意欲を高め、生きる主体としての自己の確立を促すために、現代社会の諸問題を生徒が自分自身の問題として根本から問いかけ、問い直す知的姿勢を身につけさせることを目標とする。
----------------	---

	高校入試等の分析結果・前年度の学力調査分析結果	分析結果を踏まえて検討した指導内容	指導体制の確立
年度当初	当該学年である3年生の入学試験における倫理的素養に関する分析資料はないが、人間の「生き方、あり方」を思想史を踏まえて学び、理論的に人間や自己について考え方を深めるのは生徒にとっては初めての経験である。また、生徒一人一人はこれまでの生活や学びの中でそれぞれの経験を通して、「生き方、あり方」について漠然とした考えを持ってはいるが、自己や他者という具体的な人間を踏まえながらも、筋道を立てて考えを深める手立ては十分に身に着けているとはいえない。	教科書に記してある事項を、単に覚えさせるのではなく、一人一人の哲学者・思想家がどのような時代背景の中で、どのような発想を持つことで、直面する問いに答えたのか理解し、自らの問題として捉えなおすことができるよう、分かりやすい資料や身近に感じることができる資料を提示する。分かりやすい資料を通して、人間に共通する「生き方、あり方」について自らの考えを深めるとともに、理論的に問題を追及し、他者との相互理解できる能力を育てる。	頻繁に生徒に発問し、たとえ口ごもる生徒がいても問いをやめない。答えが完結するまで問いを止めない。また定期考査でも、知識を問う問題ばかりでなく、生徒自身の見解を表明しなければならないような問題を用意する。

	生徒の変容	生徒の学力の定着状況	次年度に向けた指導体制の改善
年度末			